

解きなおしの重要性

●この号が届くときは、大学入試では少数の私立入試と国公立入試、高校入試では公立の後期を残すのみとなっているはずだ。合格が決まって万々歳の人もいれば、失意の中で途方に控えている人もいるだろう。ただし、まだチャンスが残っているのであれば、あきらめてはいけな。残された日々の中で精一杯のことをするのだ。そのためにアドバイスを少し。

●次の入試で何点とりたいのか、きつとみんな考えているはずだ。全教科 点 させるというのは厳しいだろう。しかし、苦手科目で 点 ならできないことはない。高校入試なら理社でそれぞれ 点 も十分可能だ。何をやるべきか考えて、(分らないときは私達に相談して)計画をたてよう。頭の中で考えるだけではダメ。必ず書き出すことだ。

●せっかかないことを思いついても書き留めないから忘れてしまつて、勉強にムダが発生するというのがうまくいかない人の共通の欠点だ。

●ある科目を始める。2時間

ぐらいやって、まずまずの手応え。少し休んで、また、次に思いついたことをやる。まずまずかな。そして休む。次…。もう思い出せない。学



校が休みなら、時間はとれるのに、書き出していないからやるべきことを忘れてしまつている。その結果、時間のはずが、5、6時間…。これでは伸びないし間に合わない。細かく書き出して、どんどんつぶしていくように工夫すること。

●伸びない人に共通なのは、もう一つあって解き直しをしないこと。解き直してもやり方が甘いこと。解き直さない人がよく口にするのが、「答を覚えてる。」「覚えてるからやつてもムダ。」というセリフ。本当にかわいそうだと思う。だから伸びないんだ。東大合格者といえば、受験勉強ではかなり上手な人達の集団ということになるが、彼等が最も力を入れるのが解き直し。答を覚えていようがいまいが関係ない。一回目に解くのと、解き直しではその目的も得られる成果も全くちがうのだ。

●では、どうちがうのか？一回目は、傾向を知り、難しさに慣れ、時間配分に慣れ、自分の弱点を知るためにやる。解き直しは、答や解き方がある程度覚えていいるからこそ可能な、全く別の成果を出すためにやる。つまり、答や自分が失敗した所を思い出しながら解き方をもう一度なぞるためにやるのだ。「なぞる」思い出しながらまねる」ことで初めて解き方が身につくのだ。

●また、解き直さない人はこうもいう。「同じ問題は出ない。」と。本当にかわいそうだ。やることを書き出さないこと、解き直さないことが原因で、勉強における自爆！能力の問題ではなく、やり方・考え方の問題で伸びないなんて、残念だと思わないか、そのキミ！確かに一字一句

同じ問題は出ないだろう。しかし、同じ形式で、同じ知識で、同じ難易度のものがくり返し出るので。その証拠に、模試や過去問だけでも、何回もやりこんだ人は間違いなく成績が上がっている。残された日々、解き直しを怠らすがんばってほしい。

(小林(健))

中3生の貴重な時

(前期入試の発表の後で読みなさい。)

●公立前期で不本意な結果だった人達へ。私立高校に進学を決めた人、公立前期入試で合格した人、まわりを見渡すと、ほとんどの人が進路を決定して、残されたのは自分だけ…。などと思つて、勉強にも身が入らず過こしてないだろうか。確かに、学校の雰囲気や授業の様子もどこか受験は終わった感じがして、取り残されているように感じているかもしれない。

●しかし、君たちには特別な時間が与えられたのだ。いよいよ最後の受験に向かい、本気になって勉強に取り組む機会が与えられたわけだ。ほかの人には味わえない時間だ。今までの時間とは全く別の時間だ。集中力、危機感、今までに感じたことのない感覚で日々を過ごすことになる。

●一日だけ泣いて、泣くだけ泣いて明日もう一度立ち上がろう。まずは反省。前期入試で、何か足りない所はなかったか？浮かれていなかったか？甘く考えていなかったか？

●そして、これからやることの確認。しっかりと書き出して(分からなければ塾で相談して)

計画を立てよう。

●塾に来れば同じ状況の友人達が、ともに目標に向かって頑張っている。私たちも最後まで応援する。あきらめず頑張ろう。

●また、後期入試の志望校を変更したほうがいいのかなど、悩みや不安も付きないだろう。家族や友人そして私たち講師にも相談して、悔いの少ない選択ができることを祈っている。ひとりで悩み始めると勉強にも集中できないので、誰かに相談しよう。

●とにかく、あと十日やれることを一つずつ確実に進めていこう。まだまだ、力は伸ばせるし、また集中力の上がつたこの時期の一時間は、今までの数時間に匹敵する。あきらめる必要はない。

●受験が終わったら富士急に行つて思いっきり楽しもう

(松永)

サブオタージュ

【フランス語のサボタージュ Sabotage から①労働者が団結して仕事の能率を落とし、使用者側に損害を与えて紛争の解決を迫ること。②一般的に怠けること。「サボる」の語源。③日本のシンガーソングライター大江千里の1988年の楽曲。】

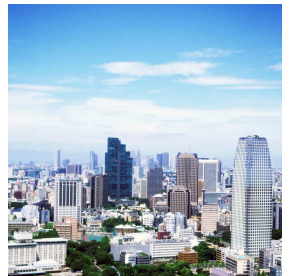
そのとき、私は九州の西の端に住む高校三年生で、当時の受験生の大半がそうだったように、部屋にいたときはラジオをつけていた(基地の街だったのでFEN(米軍極東放送)も流れて

いたが、ネイティブの英語が聞きとれるわけもなく、当然地元のFMを聴いた。入試まではもうわずかで、自分なりに勉強はしていた。だが、どのくらいやっていたかといえば、創学舎の諸君の熱心さに比べれば、恥ずかしいほどの量だったと思う。私は、すでに両親がおらず、年金暮らしの祖父との貧乏生活だったので、大学に進学したければ国公立に行くしかなかった。押さえも私立ではなく、公立大学の二部だった。こう書けばいかにも苦学生然としているが、私の場合、大学がだめなら働けばいい、などと安易に考えていただけである(世の中を知らないとは恐ろしいものである。今ならわかるが二部に通っていたら私は卒業までもたなかっただろう。それほど、社会に出るということは厳しい)。一体、どんな人生が待っているのだろうか。不安な気持ちと、卒業してこの街を出たら何かが変わるかもしれないという漠然とした期待感が、交錯していた。放課後は、勉強をするよりは、最終のバスまで街をふらつきながら、自分のことや、世の中のことや、恋人との将来のことを、とりとめもなく考えて日々を過ごしていた。

「東京で見た海は深いインクの色してた」D

Jの他愛ないおしゃべりのあとで、その曲は突然流れてきた。ピアノの刻むリズムの上ののる言葉に、私の耳は釘付けになった。それは、あたかも、その頃の私のモヤモヤした感情を見通しているかのような歌詞だったからだ。聴きながら、私は夢中で歌詞を書き留めた。曲の主人公は、東京で暮らす社会人である。彼は日常の

中で自分の立ち位置を見失いそうな焦燥感にかられている。だが、一方で、若いころから持ち続けた情熱の炎が消えたわけではない。それは彼の中にも生き続けている、現実の生活との間で常に葛藤している。



「サヴォオタージュ」と題されたこの曲の中の言葉は、まだ、何者でもない高校生にとつて、強烈なリアリティを持って投げかけられた。タイトルから推し量るに、彼は、ある日、仕事を休んで、平日の東京をさまよったのだろう。まるで、自分の位置を、あちらこちらから探し当てようとする測量士のように。当時の私は若かったから、日本の歯車のようになって働く大人たちを、主体性を失った人形のように感じて、冷笑的に見ていた。しかし、その反面、本当に強い人々とは、そういった日常を懸命に生きる市井の人々ではないかと、気づき始めてもいたのだ。「へんな街はどこでもある」妹の文字、「ヒーヒーむ」故郷の家族からは戻って来いと言われているのだろう。でも、主人公は東京で自分の生きる意味を見つけることにこだわる。「誰とでもいい。話がしたい。だけど話すことが何もない。結婚もする。子供もつくる。ありあまる情熱」大人になって、また、社会に出て、わかってきたこと、まだわからないこと、そのどちらもがある。今でもこの曲を聞くと、未来に思い

をはせていた高校生の自分が、そこに、いる。(関)

奈良漬

●昨年末、十年ぶりに奈良漬を買った。私にとって、そして恐らく私の母にとつても、特別な食べ物だ。好きなんでものではない。この世で最高の食べ物の一つだ。しかし、なかなか買えない。決して高価なものではないが買えない。買うと、涙腺がゆるむのだ。まして、食べると、ゆるんだものがあふれ出る。それを、つい買ってしまった。



●奈良漬は、物心がついてから一度しか会っていない父の思いへとつながる。私が二歳になるまでは一緒に暮らしていたが、それから大阪へと出稼ぎに行きそのままいつか音信不通となってしまった。腕の良い菓子職人であったが、九州の田舎で思いにまかせぬことが多く、より多くの収入と新たな可能性を求めてのことであったろう。小三の時、今後の関係についての話し合いで一度だけ帰ってきたのが、最後の(そして、私の記憶に残る最初の)対面であった(拙著「愛の壁」に詳しい)。それから二年後、父の親戚が来て、父の余命がいくばくもないことを伝えた。できれば母に「死に水」をとってほしいと。遠く離れて暮らし、いつ会えるのかも分からないままの細いつながり。それが日常で、子供心にも仕方のないことと思っていた

が、この知らせは、私の心を揺さぶった。何ともいえず悲しき。自分が父を慕っていることに初めて気付いた。

●さて、母は金をかき集めて大阪へと向かう。私が小三のときの数時間を除けば、十年近くの時を隔てての共に過ごす時間。父も母もどんな思いだったのか。ともかく、二人の和解であったのだ。いや、そもそもお互いを嫌っていたのではなく、いかんともしがたい背景があつてのことで和解というより元のさやにおさまったということかもしれない。そして七日後父は亡くなるのだが、彼がまだ意識がある時に母に頼んだのが、「奈良漬」であった。母は一番美味しいものを求めて、雨の降りしきる五月の大阪の街を歩いた。父は母の買い求めた奈良漬をおいしそうに食べ、感謝の言葉を述べて、やがて意識をなくしていく……。

●全てが終わって、一部始終を泣きながら語る母。このときから、「奈良漬」は私にとって特別なものとなった。帰省すれば、必ず置いてある奈良漬。母の中にある思い出がそうさせているのだらう。不思議と、実家で食べるときは、父のことを思い出しつつも普通に食べられる。母と一緒だからか。しかし、一人ではだめだ。私の家族といつてもだめだ。そして、やはり今回も……。私と父と母をつなぐ食べ物。「奈良漬」の思い出である。(小林(健))

▼▲継続希望の方へ▲▼

- ◆卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
- ◆継続をご希望の方は、在籍なさっていた教室までご連絡下さい。